

令和4年度 東京都内湾水生生物調査 9月成魚調査速報

●実施状況

令和4年9月16日に成魚調査を実施した。調査当日は中潮で、満潮が8時25分、干潮が13時49分であった(気象庁のデータ)。調査当日の透明度は1.0~1.9mであった。また、St.25では赤潮が、St.35、25、22では貧酸素状態がそれぞれ確認された。

	St.35		St.25		St.22		St.10	
作業時刻	9:52-10:38		10:41-11:16		11:26-11:58		12:00-12:37	
水深(m)	25.9		13.9		14.3		8.2	
天候	晴		晴		晴		晴	
気温(°C)	28.2		27.0		29.2		28.8	
風向/ 風速(m/sec)	N/0.2		ESE/1.0		-/0.0		NNW/0.3	
波浪(m)	0.3		0.2		0.2		0.2	
透明度(m)	1.9		1.0		1.6		1.4	
観測層	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層
水温(°C)	24.8	20.6	26.1	21.4	26.6	21.3	27.0	23.5
塩分(-)	28.9	33.5	19.8	33.0	27.1	33.2	28.0	31.8
DO(mg/L)	10.3	1.1	15.1	1.0	14.1	0.3	12.4	6.9
DO飽和度(%)	147.2	15.4	208.4	14.2	204.8	4.5	181.9	98.3
pH(-)	8.5	8.0	8.7	7.8	8.7	7.8	8.6	8.1
水の臭気	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
備考	下層で貧酸素状態(DO:2mg/L以下)が確認された。		上層で赤潮状態(DO:2mg/L以下)が、下層で貧酸素状態(DO:2mg/L以下)が確認された。		下層で貧酸素状態(DO:2mg/L以下)が確認された。			

観測層: 上層(0m)・下層(海底面上1m)

●主な出現種等 (速報なので、種名等は未確定です。)

主な出現種等	St.35	St.25	St.22	St.10
魚類	カタクチイワシ(r)	出現せず	出現せず	出現せず
魚類以外 (目立った種)	出現せず	出現せず	ホンビノスガイ(+)	ホンビノスガイ(c) サルボウガイ(r)
備考	チヨノハナガイ、ムラサキイガイ、ゴイサギガイ、ツキガイモドキ、タイラギ等の死殻が確認された。	トリガイ、チヨノハナガイ、コウロエンカワヒバリガイ、アサリ、サルボウガイ等の死殻が確認された。	チヨノハナガイ、ツキガイモドキ、ゴイサギガイ、イヨスタレ、ミドリイガイ等の死殻が確認された。	ミズクラゲやチヨノハナガイ、イボキサゴ等の死殻が確認された。

注)表中の()内の記号は大まかな個体数を表す。

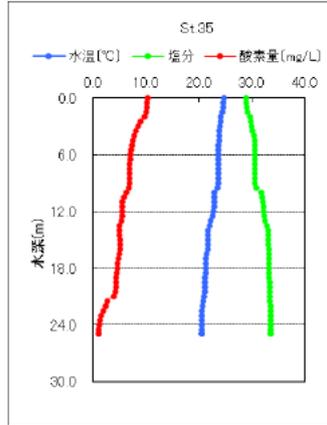
G:1000 個体以上、m:100~1000 個体未満、c:20~100 個体未満、+:5~20 個体未満、r:5 個体未満

調査地点：St.35

調査地点位置



水質状況



地点状況



南側には東京湾アクアライン「風の塔」が見える。

採取試料



東京湾の表層域では最も個体数の多い魚種である。沿岸域の表層付近を群れで泳ぐ。口を開けると下顎だけが垂れ下がることが名前の由来。網の揚げ降ろし時に入網した。

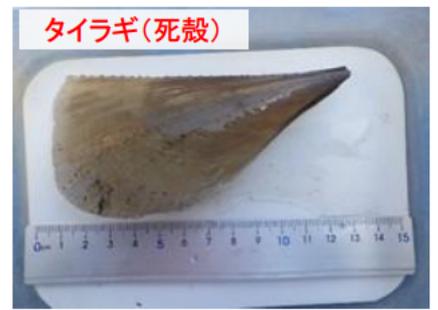
主な出現種 ※写真のスケール 1 目盛: 1mm



水深 25m 以深の砂泥底に生息する。本種を含むツキガイ上科は水管を持たず、足が小さく細長いことが特徴である。



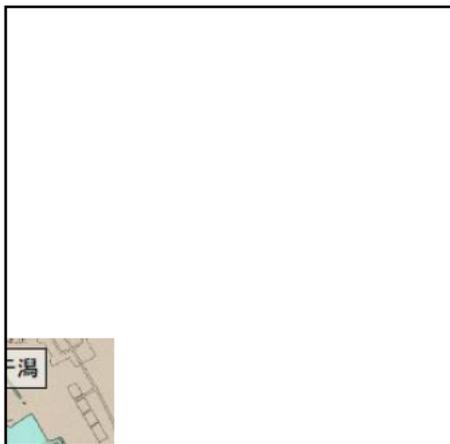
水深 30m までの砂泥底に多く生息するウミウシの仲間である。生時は軟体部が薄い殻を覆っている。生体はこれまでの調査でも度々確認されている。



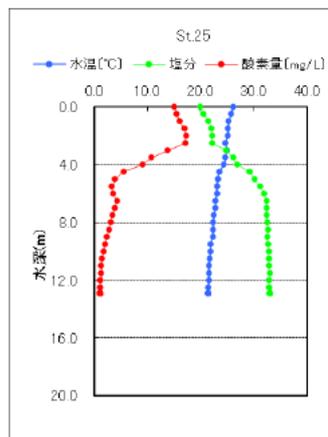
尖った側を下にして海底に突き刺さったようにして生息する大型の二枚貝。成長すると殻長 25cm を超えるが、東京湾の湾奥部の個体は春から秋にかけて発生する貧酸素水塊によって死滅する。

調査地点：St.25

調査地点位置



水質状況

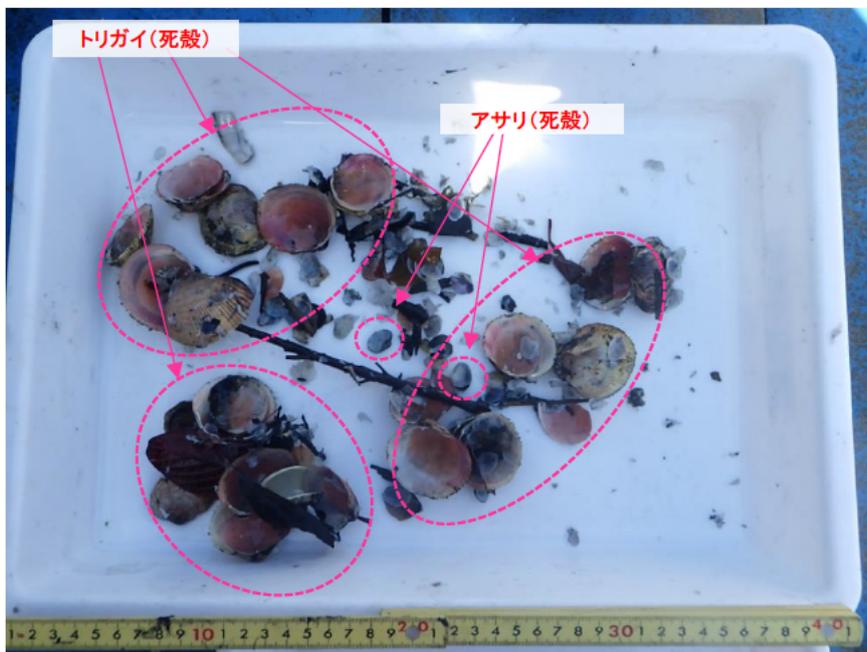


地点状況



西側には東京国際空港が見える。

採取試料



ほぼ球形で、殻は薄く脆い。長い足が鳥の嘴に見えることが名前の由来とされる。内湾の砂泥底に生息し、湾奥部では夏季の貧酸素水塊の発生により、ほとんどが死亡する。貧酸素水塊解消後に出現した稚貝は翌年春に60mm程に成長し、漁獲される。

主な出現種 ※写真のスケール 1目盛:1mm



オーストラリア、ニュージーランド原産のイガイの仲間。日本には1970年代に見つかった外来種であり、日本以外にもアドリア海等で発見され問題となっている。内湾～河口の潮間帯に生息する。水質汚濁や塩分の変化に強い。



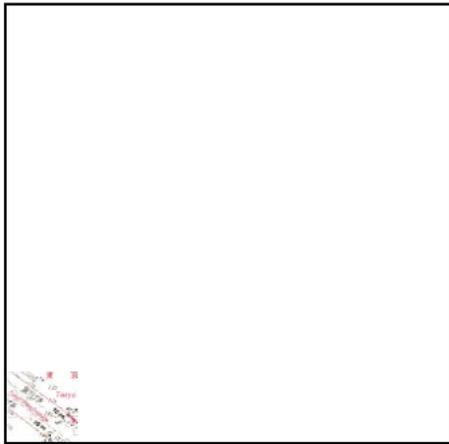
地中海沿岸が原産の外来種である。海水域の潮間帯の岩等の硬い基盤に足糸で固着する。漁網、ロープ等の漁具や漁船の船底に大量に付着し汚損被害を生じるだけでなく、夏季の高温により大量にへい死し、それらの腐敗により水質汚染が発生することがある。



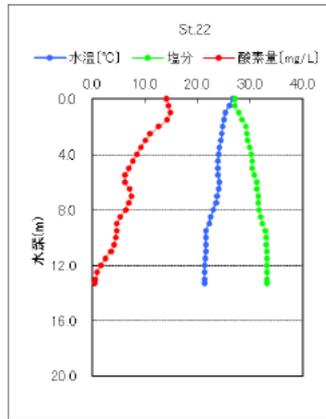
内湾の干潟や砂地に生息する。潮干狩りなどで盛んに獲られている代表的な二枚貝。模様は変異に富み、地域により傾向も異なる。東京湾のものは模様のコントラストが強いものが多い。また、左右対称の模様になるか、左右非対称の模様になるかは遺伝により決まるとされる。

調査地点：St.22

調査地点位置



水質状況



地点状況



北西側には東京ゲートブリッジが見える。

採取試料



ホンビノスガイ

北米原産の外来種で、殻長 10cm を超える大型種。貧酸素環境に耐性があり、東京湾を代表する二枚貝となっている。本来、殻は白色だが、貧酸素環境で生育したものは硫化物の影響で黒ずむ。

主な出現種 ※写真のスケール 1 目盛: 1mm

イヨスダレ(死殻)



水深 5~30m に生息する。光沢が有り美しい網目模様の殻を持つが、硫化物の影響で黒ずむ個体もある。

ミドリイガイ(死殻)



西太平洋・インド洋・ペルシャ湾の熱帯海域沿岸が原産の外来種である。2000 年代以降、日本列島沿岸の各地でムラサキイガイの生息個体数が減少し、本種やコウロエンカワヒバリガイに置き換わる現象が記録されている。海水温の上昇が原因と考えられている。

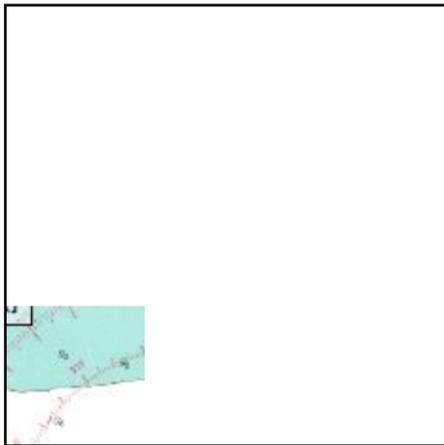
ゴイサギ(死殻)



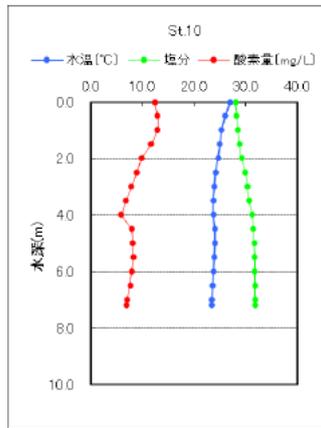
殻長 5cm 程度になる。水深 50m までの砂泥底に生息する。平べったい殻は白く光沢がある。殻の表面についている黒い薄皮のようなものは、泥ではなく殻皮(かくひ)と呼ばれる貝殻の一部。タンパク質から成り貝殻を酸から保護する役割があるとされる。

調査地点：St.10

調査地点位置



水質状況



地点状況



北側には、東京ディズニーリゾートが見える。

採取試料



その他出現種 (調査範囲外)

コノシロ



体長 10 cm 前後のものは「コハダ」と呼ばれ、東京湾を代表する魚の一つ。

St10での調査後、網洗いのため水面付近で曳網中に3匹が入網していた。過年度調査でも同時期、同地点での網洗い中に入網したことがある。

主な出現種 ※写真のスケール 1 目盛: 1mm

サルボウガイ



干潟、潮間帯上部から水深 20m の砂泥地、汽水域などに多く、幼生期をアマモなどに付着して過ごす。成長するに従い砂泥地にもぐり込む。

イボキサゴ(死殻)



内湾の干潟や砂地に生息する小型のキサゴの仲間。表面に疣ができる個体が多いことが名前の由来。色彩変異に富む。

タニシの仲間(死殻)



淡水に生息する巻貝の仲間。陸生や淡水生の貝類の死殻も時折海で見かけることがある。河川から流されてきたものと思われる。